

障害のある子どもや家族を支援していくために必要な連携の重要性について

1. はじめに…放課後等デイサービス事業所の悩み【3分】
2. 「子どもの放課後」とは何か…多様な世界体験の必要性【5分】
グループワーク①：皆さんの過去の放課後生活を話し合ってください【9分】
3. 生活の全体像を問う…なぜ、連携が必要か？…＝ソーシャルワーク原則＝【10分】
グループワーク②：皆さんの事業所はニーズのどこを担っていますか？【9分】
グループワーク③：相談支援事業所（相談支援専門員）に望むこと【9分】
4. 発達支援事業の目標…「自立」「自己肯定感・自尊感情」を問い直す【15分】
5. 「人は発達するために生きているのではない」…「発達」を問い直す【7分】
6. 最後に・・・【3分】
7. 質疑応答（残り時間があれば…）>10分
*できれば、グループワーク③の共有

1 はじめに…連携の重要性という当たり前のことが難しい理由…

よく指摘されているように、現状の放課後等デイ制度では発達支援の視点と、家族支援も含めた生活支援の視点との折り合い・整理がしにくくなっており、本人・家族のニーズの多様さに制度設計がうまく対応できていません。「発達支援」と「居場所の提供の支援」という支援目標が異なる活動を同一グループ・同一場所・同一時間で提供せざるを得ない事業所が多い現状では、個別支援計画の実施そのものに無理が生じます。子どもにとっては両方大事な時間ですが、これがごちゃ混ぜになっているのが現状です。

例えば、週のほとんどをいくつもの事業所を利用して放課後・休日を過ごしている例があります。その必要性について、ご本人の「発達支援的ニーズ」と「家族のレスパイト、就労支援的要素」の整理ができない理由も、上記した「制度設計上の不備」が原因です。

この実態に対しては、その事業所が果たしている役割(事業所のストレングス)と場所によっていろんな姿を見せている子どもの様子をお互いに共有する(つまり連携)視点が必要ではないかと思えます。

同一な目標を持った事業所同士であれば、その連携の意味は比較的わかりやすいものになると思えますが、支援の形態や目標・目的が多様化しているため、その意味合いが見えにくくなっているのかもしれない。自立支援協議会などでは「他の事業所がどんな取り組みをされているのか知りたい。意見交換をしたい」という意見は圧倒的に多いのですが、個別な「安定している」ケースのついての連携になかなかつながっていないように思えます。どんな情報をどのように共有しなければならないのかを考えてみたいと思います。

2 子どもの放課後とは何か。子どもに必要な多様な世界体験とは？

ガイドラインでは「支援の形態の多様性」に触れています。ということは、私たちは「子どもの生活に必要な世界体験の多様さ」を考える必要があります。

例えば…(グループワーク①)

個人的には、自立生活を支える力は以下の5つです。

- ① 「依存」できる力(支援者との人間関係・人に頼る力)
- ② 一人で過ごせる力(…目を離せるようになる…ではありません。支援者との距離感のことです。)*でも、週7日支援を受けていてどこでこの力がつくんでしょうか?
- ③ イヤがいえる力(他者との信頼関係<>強制された自己決定・過剰適応)
- ④ 体験する力(失敗できる力)
- ⑤ モデルを持てる力(他者を認知できる力>他者認知力が自己認知力につながる)

親(社会)の「自立生活」のイメージは「一人でできること」です。しかし、私たちにとって「自立」の同義語は「依存」であり、対義語は「孤立」です。(対応困難事例の際たるものはセルフネグレクトです)

「自己肯定感(自尊感情)」

自己肯定感を問うのであれば、まず「自己」とは何か…を考える必要があります。

家族・他者との二者関係=愛着関係=、三項関係へのひろがり、家族や他者そのものへの関心の広がり=自己認知のベースは他者を認知する力・他者とのかかわりの中に存在する=、家族や他者に認められている自分を認知するという二重構造…

また、自己肯定感を育むという関りについて、「子どものことを褒めることが重要です」と言われますが、褒めるだけで「自己肯定感」って身につくのでしょうか。

子どもにとって支援者(家族も含めて)はどのような存在なのでしょうか？

子どもたちは意図する・しないに関わらず、「評価者」として私たちを見ている側面があります。「評価する人<>される人」の二者間の構造の中で得られる自己肯定感は、その二者間でのみ有効で、課題等が出来ることが条件の「**条件付き自己肯定感**」です。

*同じように、成人施設においても支援者側がどのように配慮しようと、気を付けようと、利用者側から支援者は「権力者」として存在せざるを得ない歴史的・構造的な「宿命」を持っていることに注意する必要があります。

「できる・できない」「する・しない」「評価される・されない」に左右されない「**根源的(絶対的)自己肯定感**」は家族(他者)関係における絶対的な受容(愛着関係)に支えられますが、フォーマルな支援者たる私たちにそのような受容関係をつくることは困難です。

そこで登場するのが、子どもと集団・社会との関係性です。

…突然ですが…

皆さんはマズローの「自己実現」をどのように訳されますか？

私は「人の役に立ちたい」と訳しています。あなたの存在・行動・言葉・振る舞いが私(支援者)に・集団に・社会に「どのように役に立っているか…を実感を持って本人が感じることが出来る環境や関係性を構築することが、支援者の役割ではないかと思います。

「…できるようになってよかったね！よくできましたね！」という設定も大切ですが「助かったわ！ありがとうな！」という関係性を集団・社会の中に汎化していくこと(みなさんが実践している役割活動等)が、本人の「**普遍的な自己肯定感**」につながるのではないかと思います。

また、人が力をつけたり、望ましい行動ができるようになっていくプロセスには、「よいモデル」が必要です。目指す姿を抽象的な言葉(計画)ではなく、具体的な存在(友達でも先輩でも親でも親戚の兄ちゃん姉ちゃんでも支援者でも隣のおっちゃん・おばちゃんでも、きょうだい・しまいでも…)が重要です。「あこがれる姿になっている自分」が意識できたときはうれしいもの=自己肯定感が上がる=だと思っています。

5 人は発達するために生きているのではない

『人は「発達」するために生きているのではない』 <子どもという自然>に会う 浜田寿美男

「子どもが大人になるという発達は、もちろん一つの自然の事実としてある。しかし、それは同時に、つねに時代の文化に包まれていて、それを切り離してみることはできない。実際、この今という時代においては、「発達」に価値的な意味合いがこびりついていて、親も教師も、そして療育や相談の関係者も、やたらと「発達、発達」と叫ぶ。

本来「発達」は、個々の子どもが「**手持ちの力**」*最大のストレングスです(須河注釈)で今を生きた後にやってくる自然な結果』であるのに、そこが逆立ちして、その単なる自然現象である以上に、「明日に向けて頑張るべき目標」になっているのである。(…がんばって明日身につく力を今日使うことはできない…)

この現実を見るにつけ、私は、ついつい「人は発達のために生きているのではない」などと皮肉を言うてしまう。実際、**発達を目標にした**ところで子どもたちがどれほど息苦しくなっているか。そのことをあれこれの現場で見てきた…」

子どもは「発達」によってつけた力をどこで発揮するの？

何のために「発達」するの？「発達」したら幸せになるの？

そのことを問わない「医療モデル的な発達支援」は危険だと思うのです。

「発達」「発達支援」は重要です。しかし、そのことだけに注目して、子どもの生活全体に目を向けない「発達観」や「発達至上主義」「発達しないのはダメなこと」といった見方には注意しなければならぬと思っています。

「発達」しなくても子ども(人)の世界は豊かになりうるという現場を私たちは見えています。逆に「歪な発達【誤学習】」が人を不幸にすることもあります。その事実を大切にしながら、子どもたちが「発達する＝豊かな人生を送るための道具を得ること」を支援したいと思います。

6 最後に

各事業所と相談支援専門員が、一緒に考え、定義し、共有すべきは「子どもの世界の多様さ」「ソーシャルワーク論」「子どもや家族の生活等の全体像」「自立観」「自己肯定感」「発達観」であると思います。(ここに記したものはあくまでも個人的な「定義」です)

これらに基づいて子どもの情報や関わりの方法を共有し、役割分担を明確にすること(これが連携と呼ばれるもの)が重要ではないかと思っています。

子どもの姿は、場所や集団や関わり方や支援者の顔によって、ばらばらで、統一されておらず、ズレているのが当たりまえです。そこに子どもらしさがあります。子どもたちが様々な場面で表出しているばらばらな姿・力を自分自身で統合し、汎化していくプロセスを発達と呼びます。そのための関わりの工夫が支援者の役割であり、そのために、まず支援者同士は連携によって統合された子どもの将来像を見つけていくことが必要であると思っています。